

▼ため池百選の代表的扱いとなった幻想的な「玉虫沼」

農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進



地方創生 『高品質で町づくり』

伝統繊維産業は地域経済の活力剤

山形県

山 辺 町

やまのべまち



山辺町の概要

山形県の形は、人が笑っている横顔に例えられます。笑顔時にできるエグボの場所が山辺町の位置です。

人口は、平成29年3月時点で14、635人。県都山形市を東隣にし、先に宮城県境の蔵王山と奥羽山脈を望むことができます。その懐にある扇状地に県都の

市街地を眺められ、山形盆地の対面に位置し、西部には出羽丘陵があります。市町境に蔵王を源流とする一級河川須川が流れており、須川に向かって出羽丘陵地から傾斜地となつて、そこに田園風景と人口集中地を兼ね備えて平野部を形成しています。

また、丘陵地には中山間地の集落があり、日本の棚田百選「大蔵の棚田」、ため



▶収穫を待つ、杭掛け風景が特徴の「大蔵の棚田」

池百選の「玉虫沼」を代表する風光明媚な地で、里の名水やまがた百選に選ばれた湧水群のある地域が点在しています。さらに、山辺町は四季が明確で、気候を活かした果物を始めとする農作物の生産も充実しており、近年の気候変動の中でも風水害は少なく穏やかな地域です。

繊維産業のニットと緞通

本町は古くから絹織、木綿、蚊帳、藍染など繊維産業が拓けており、繊維の町



▶高品質なものづくりを支える職人技（手織緞通）



牡丹（上）と桜花図（左）の手織



として歩み続け、昭和になってから緞通やメリヤス（ニット）業が営まれ、産業として発展してきました。

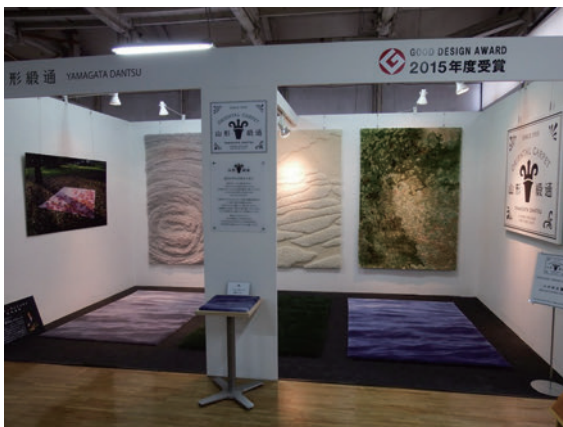
ニット業は、農業と共に基幹産業で栄え、特にサマーニット発祥の地として、商工業などへの波及もあり、町は繁栄を謳歌していました。昭和50年代を最盛期に法人・個人及び染色等の関連業を含め154事業所でしたが、平成26年には13事業所に激減しています。

一方の緞通業は町内に1社で、昭和10年に女性力を活かすため、中国技術者から手織絨毯の手解きを得て、段階的に手刺絨毯やマーセライズ工法（化学薬品洗

濯による艶出し）という特殊技術開発と共に発展してきました。製品は皇室を始め、国内公共施設のビブブルームなどの足元を色鮮やかに迎えする逸品となっています。手織はオーダーメイドで日数が掛かり、手刺は短期間での作成が可能ですが、総合的に高価格帯の製品づくりの産業です。経済界に大きな影響を与えたりリーマンショックと東日本大震災後には、生産数が激減する状況となりました。

繊維産業の様々な動きと現状

本町のニット業界の業態は、問屋やアパレル、百貨店等からの依頼による製品作成、いわゆる下請け専門で、最盛時には同製品の大量生産が主流でした。その頃から、気軽に地元で購入可能な販売店やブランドなど、自社発信の製品づくりを期待する声がありました。年が経ち、ニット業界だけでなく繊維業界全体で中国製等の海外製品との低価格競争が激化し、本町のニット関連事業所も廃業や倒産などに追い込まれる状態に至りました。山辺ニット同業会の資料では、会員数が平成3年の52社から平成28年現在では17社と減少しています。大量で安価な海外製品の台頭から生き



▶グッドデザイン賞受賞の山形緞通の作品

残るため路線変更は既定となり、少数生産の高品質で高価格帯の生産へと変遷しています。現在操業している事業所は、それぞれに自社ブランドや自社発信のデザイン力を持ち、新たな強みを蓄え始めました。また、平成18年から町内でのニット産直の販売店も5社の連携で実施され、現在は4社でニット産地の町をアピールしています。

緞通は、ほぼ受注生産、オーダーメイドが主体で、高価格の路線経営を終始一貫しています。そして、前述した経済の変化を革新のチャンスと捉え、手織を始めとする高い技術を維持しながらホーム

ユースの価格帯の手刺絨毯に新たな付加価値を与え、中心に据える業態に変更しています。一例として、県内出身者でフェラーリ等のデザインを手掛けている世界的工業デザイナーの奥山清行氏や国立競技場等の建築設計で有名な隈研吾氏とのコラボレーションを行うことに。それぞれのデザイナーによるラインを主に多売する戦略を追加して「山形絨通」という新たなブランドとして立ち上げていきます。その取組が認められ、平成27年にはグッドデザイン賞を受賞し、さらには、平成29年に運転となるJR東日本の「TRAIN SUITE四季島」の足元に敷き詰められ、低迷期を抜け出す力を持ち始めています。

『高品質で町づくり』を掲げる

地方創生を推進するに当たり、本町は、平成27年10月に『やまのべ人口ビジョン・やまのべ総合戦略』を策定し、二つの大方針「子どもと育つ町」と「高品質で町づくり」を柱に展開することとしています。どの自治体も同戦略策定までには、短期間で住民アンケートの実施や代表者からなる委員会等による協議を行っているようですが、地方創生の理念は、町

の持つ強み、眠っている宝などを磨き上げることです。その認識を基本にした行程で、大方針等を含めて総合戦略は決定されています。当然、高品質のニット及び絨通の繊維産業は、町の強みや宝であることは織り込み済みとなっています。本町では、総合戦略の下、平成28年度に「伝統繊維産業いきいき活躍プロジェクト」（以下「いきいき活躍PJ」といふ）を実施しています。

個性的な取組

いきいき活躍PJは、官民共同で実施し、雇用の充実を図ることを主眼にした仕事づくり、他産業への波及と連携を目的に3本の柱を立てています。一つ目は、ブランド強化を目的に首都圏の展示会ではトップセールスでアピールし、地元等では認知度を高める足固めの展示会等を開催すること。二つ目は、海外進出やインバウンド対応を推進する企業の支援を行うこと。三つ目は、農産品等の高品質なものづくりと共に多産業への波及を図るためのPR情報誌等を作成することです。

山形絨通及びやまのべニットの東京都内での展示商談会には、町長によるトッ

▶ やまのべニットのトップセールス



プセールスを実施しています。その際、町長は自身の顔を編んだセーターを着込んで陣頭に立ち、高品質の技術をアピールしています。「まるでプリントのようだ」との声が多く、話題性で地元のマスコミに取り上げられました。この年、山形県では「全国技能五輪2016」が開催され、当町も6職種の会場になり、併催事業の一つに絨通の手織り職人の実演と製品の展示やニットの展示即売を行いました。大盛況と共に全国に高品質な繊維産業を発信することができました。

海外進出は、パリ進出と台湾進出の事業所を公募して展示商談会への支援を実

施しています。インバウンド対策は、山形絨通の産業観光施策として、パンフレットの英語版を共同作成しています。おりしも、伊勢志摩サミットにおいて、日本のものづくりブースに和モダン絨通を展示。その際には、海外の人々への披露を担うことができました。

また、繊維産業を核に農業、商業や他工業などの町内の高品質なものづくりを主体に、製造過程の情報と観光を冊子に取りまとめた情報誌『やまのべPride』を初めて製作。英語版も仕上げ、同時にデジタル情報誌として町のホームページにもアップしました。町への魅力や興味



▶ ものづくりと観光等の情報満載な自慢本『やまのべPride』

を感じてもらおうツールとして、交流人口増加等に繋げたいと考えています。同冊子を有効に活用しつつ、今後、都市圏等で行われる各企業独自の展示商談会等で連携を組んで、高品質なものづくりの魅力を一体となって発信していきたいと考えています。

『ニット産地の町』を町内上げてPR

前述したとおり、昭和40、50年代のニット産業で町経済は潤っていました。「あの時が、再び」という気運を高めるために町の銀行団、商工会、ニット同業会、町の四者でプロジェクトチームを結成。「ニット産地の町」のアピールを目的に、新たなムーブメントを興そうと事業を展開することになりました。

全国的なニットの日(2月10日)に合わせて2月末又は3月初旬にある第1回定例会での「ニット議会」の開催日を再検討し、さらに議会開催日に町内各地でニットに親しみ、着なすことを広げる日を制定する意向が示された。その日、12月10日を、いつでもニットの日」と独自に設定することとしています。その前後には、ニット企業団体等の即売、関連

いつでもニットセレクション



イベントを企画実施し、町広報紙でPRするなど推進していくこととしています。いつでもニットの日を普及するために、県内にある東北芸術工科大学の学生にロゴデザインを作成いただき、発表時には、『いつでもニットセレクション』と称して、各社の新作等のニット製品を展示し町内外にアピールすることに成功しました。

この事業が、単年度のみならず、ずっと「ニット産地の町」を長くアピールし続けるために毎年実施することを四者で確認し、ロゴデザインの商標登録の手続きを始め、記念日制定を具体的に進めて

いつでもニットの日」で12月開催のニット議会



います。

ロゴデザインの活用方法には、ニット同業会や町内の組織からアイデアがスタートしており、活用方法の検討が急務となっています。やまのベニットのアピールと共に地域ブランドの促進強化を図っていきたく考えています。

伝統の繊維産業を核に各種事業を展開しましたが、そこで知り得たことは、織

今後の展開は

繊維業が持つ色、柄、デザイン、技法などによる流行があり、繰り返してお客様に手を取っていただくためには、人の記憶に留められることが重要であるということです。忘れられないよう努力することが必要で、SNS等に取り上げてもらうこと、情報発信を続けることの大切さを理解し、そのためには官民協働が重要であると考えます。これは、ブランディング作業にも通じ、今後も情報発信を継続的に実施すべきと考えています。

また、この度のいきいき活躍PJで得たもう一つのこと、繊維産業の地元での販売、いわゆる産直は、集客力があることが実証されたことです。そこで今後は、山形縦通ややまのベニットの各社等が行う感謝祭等の販売会への来場者を飲食店や他店等に繋げ、拡げていくことが、『高品質で町づくり』の目指すべき方向といえます。そのためには、農産品を含めたものづくりを核に質の高い農商観連携を具体的に進め、より大きな輪に広げることが課題であると考えています。

山辺町 産業課

平成29年9月11日付第3013号

農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進

▼田んぼアート「一寸法師」

福島県

鏡石町

かがみいしまち



田んぼアートを活用した 地域おこし

鏡石町の概要

♪ただ一面に立ちこめた 牧場の朝
の霧の海 ポプラ並木のつつすりと
黒い底から勇ましく 鐘が鳴る鳴る
カンカンと・・・♪

誰もが一度は聞いたことのある、唱歌
「牧場の朝」。そのモデルとなった鏡石



町は、福島県中通りの中南部に位置し、面積が31・30km²、東西7.7km、南北7.5kmの平坦でコンパクトな町です。福島空港や国道4号線、東北縦貫自動車道鏡石スマートインターチェンジ、JR東北本線鏡石駅といった高速交通体系にも恵まれています。

年間の平均気温がおよそ18度と内陸性の温暖な気候に加え、豊かな水資源と肥沃で平坦な耕地が広がる地の利を活かし、古くから水稲や野菜、果樹、畜産などが営まれてきました。現在では、特に米、きゅうり、いちじく、りんごといった品目の生産額が多く、「石瀬きゅうり」や各種果樹の産地として知られています。一戸当たりの農業所得が福島県内でもトップクラスを誇るなど、農業が主要産業の1つとなっています。

最新の第20回国勢調査の確定値では、本町の人口は前回より2.6%の減少となったものの、15歳未満の人口の割合が県内で1番高いという結果が出ました。また、町の中央に位置するJR東北本線

▶ 田んぼアートのは場所は駅のとおり



鏡石駅を中心として、半径1.5km圏内に人口の7割以上が居住していることから、駅を中心とした「コンパクトで住みやすく、若い世代の多いまち」であると「言えます」。

田んぼアート

このような地域の特性を活かし、農業の普及啓発と駅を中心としたまちなかの活性化を図るため、また、農業と観光

が連携した新たな観光スポットを創出するため、「田んぼアート」が計画されました。

「田んぼアート」とは、「コシヒカリなど食用のお米とは異なる色のついた古代米や観賞用の稲を使い、田んぼをキャンパスに見立てて絵を描き出すものです」。

もともと田んぼアートは、青森県田舎館村が村おこしのひとつとして平成5年（1993年）に始めた試みで、当初は「稲文字」として始められました。平成16年（2004年）から遠近法が活用され、巨大なアートがより芸術的になり、平成23年（2011年）には「第15回ふるさとイベント大賞」を受賞し、農業と観光が連携した取組が高く評価されました。

現在は、全国各地で個人や団体によって、約200箇所を超えているといわれる田んぼアートが手掛けられており、地元住民の結束力を高める地域行事、田植えや稲刈りなどの農業体験、収穫したお米を活用する6次化産品などの話題性から、近隣や遠隔地まで多くの観覧者等を呼び寄せる新しい観光資源の創出として取り組まれています。

これまでの経過

本町では当初、田んぼアートは平成23年度の新規事業として計画されていきました。しかし、東日本大震災により、事業を予定していた水田に通水するための水路が破損したため水を確保することができず、中止を余儀なくされました。さらに、原子力発電所の事故により、放射線による影響が懸念されたことで、次年度以降の実施も危ぶまれていました。

その後、1年をかけて水路の復旧や水田の除染に伴う土壌改良が行われ、稲の作付けが可能となったため、平成24年度には1年越しの実施にこぎつけることができました。その際に、「復興のシンボル」となるよう願いを込め、先進地である青森県田舎館村や山形県米沢市からアドバイスを受けながら、約50aの水田に合計4色の稲で唱歌「牧場の朝」をテーマに初めて田んぼアートを描きました。

鏡石町の田んぼアートは、町図書館のすぐ隣のほ場で実行しており、町図書館4階の展望室から見下ろすことができます。遠近法を活用することにより、4階

の展望室から見下ろした時にだけ、美しい絵柄を見ることができるようになりました。遠近法を活用した田んぼアートを実施しているのは、福島県内では鏡石町だけです。

また、図書館から眺められることから、2年目以降は「窓から眺める絵本」もう一つの図書館」をコンセプトとし、絵柄を「童謡・童話シリーズ」として毎年展開しています。2年目の桃太郎から始まり、金太郎、浦島太郎、かぐや姫、といった絵柄が進めてきました。そして、6年目を迎えた平成29年（2017年）は、「一寸法師」をテーマとした絵柄で作成しました。

また、平成29年は本町が町制施行55周年であることから、町制施行55周年記念事業として、前年より18a面積を拡大した約70aの水田にアートを描きました。さらに、使用する稲の種類も増やし、6色7種類の稲を使って実施しています。

地元高校生ほか、多くの方の協力

田んぼアートは多くの方の協力によって成り立っています。特に地元の高校である県立右瀬農業高等学校の生徒

(以下、岩農生)の協力は不可欠です。岩農生には、田んぼアートの作成において大変重要となる「稲の育苗」と、凶柄を点で結ぶための「測量作業」において、授業の実習として全面的な協力をいただいています。今日まで田んぼアートを継続することができたのは、岩農生の協力あってこそです。岩農生としても、田んぼアートを通して社会と関わりながら学ぶことでより実りある実習となっているなど、双方によってより良い形での連携が取れています。また、高校



▶岩農生による種蒔き

◀岩農生による測量作業



生との連携は話題を呼び各種メディアに大きく取り上げられたことで、観覧者の増加にもつながっています。

田んぼアートは、様々な色の苗をそれぞれ決められた場所に植える必要があります。また、稲刈りも、様々な色の稲穂が混ざらないように手作業で行います。50a(平成29年は70a)もの水田での作業を手作業で行うには、多くの方の協力が必要です。そこで本町では、毎年5月下旬の田植えを「豊作祈願田植え祭り」とし

て、また、10月上旬の稲刈りを「豊作万歳稲刈り祭り」として、それぞれ参加者を募って実施しています。これらのイベントには、鏡石町民や県内外からの一般の参加者と関係者約300名の方に参加いただいています。

観せるから食べる、
そして、輝る。田んぼアートへ進化

田んぼアートの緑色の部分には食用米福島県オリジナル品種「天のつぶ」を



▶豊作祈願 田植え祭り

◀保育所での田植え体験



使用し、収穫したお米を「田んぼアート米」として活用しています。稲刈りイベントの参加者の昼食に特製おにぎりとして振る舞うほか、町内の小中学校や幼稚園・保育所の給食に提供しています。田んぼアートに関連し、幼稚園・保育所に出張して田植え体験を行うなど、「食育」の取組も展開しています。

また、田んぼアート米を米粉にし、町内のパン屋さんではこの米粉を使用した米粉パンやパウンドケーキを開発・商品化し販売しています。

ここでも岩農生に協力をいただき、米

◀ 岩農生が開発した米粉のマドレーヌ



粉を使用したマドレーヌなどの洋菓子を製造するなど、6次化事業にも取り組んでおり、それまでの「観せる田んぼアート」から「食べる田んぼアート」と、新たな展開を図っています。

そして前年度からは、「窓から眺める絵本・観せる田んぼアート」をさらに進化させました。田んぼアート事業の新たな取組として、LEDを活用したイルミネーション「〜きらきらアート〜」を初めて実施しました。

このきらきらアートは、町内の小中学

生、岩農生の皆さんの願いを込めた「将来の夢メッセージカード」を挿入したLED装置「ペットボトル」を希望の苗として約4,200本を設置し、これに約4万5,000個のLED電飾を加え、稲刈りの後の田んぼで絵柄をイルミネーションにより再現したものです。

「輝る田んぼアート」として冬の夜でも田んぼアートの観覧を楽しんでいただけになりました。



▶ きらきらアート

課題

田んぼアートは年々観覧者数が増加し、平成28年度には2万2千人を超え、平成29年は3万人を超える方が訪れています。観覧する多くの来訪者が鏡石町内や近隣市町村の観光地、商店街へ足を運ぶことで、交流人口の増加による相乗効果が生まれ、地域活性化にも繋がっています。

このように田んぼアートに魅せられて県内外から多くの観覧者が訪れます。この集客力を活かして、町での滞在時間の増加、町内飲食店の利用等へどうつなげるか、手段を検討する必要があります。

また、観覧者の増加を図るためには、図柄のスケールアップと使用する稲の色や種類の増加による総合的なレベルアップも必要となります。

このような課題を改善していくことがさらなる交流人口の増加につながります。それにより着地型観光・旅行や6次化産業への取組に拍車がかかり、町全体の活性化につながっていくものと思えます。

鏡石町には何があるのか、何か美味し

い食べものはあるのかを連想させるような仕掛けの検討、来訪者が周遊したくなるような、鏡石町の「おいしいもの」を活用した6次化産品の開発など田んぼアートを起点とした地域おこしや、これまで関心の薄かった観光分野と盛んである農業が連携することによる地域特性を活かしたブランドづくり等、そこできかない付加価値が付けられるものを地域住民と考え、組織が共同したプラットフォームを構築する必要があります。

田んぼアートからの戦略は、観覧するだけの田んぼアートではなく、体験や食を通じての取組、そして、原発事故からの風評被害の払拭を目的とした話題性と問題解消へのチャレンジです。

これからも田んぼアートを継続し、地域と連携した鏡石町の復興のシンボルとして、地元町民はもとより県内外からの多くの来訪者へ感動とインパクトを与えていきたいと考えています。なぜならば、それが鏡石町の特性を活かした最良の「地域おこし」だからです。

鏡石町長 遠藤 栄作

(平成30年1月8日付第3025号)

▼昭和村フォトコンテストにて
優秀賞昭和村議会議長賞「パッチワークの丘」

農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進

群馬県

昭和村

しょうわむら

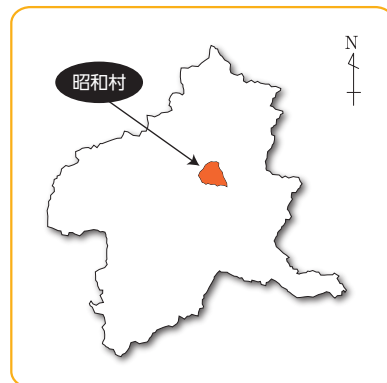


住民と行政の協働した美しいむらづくり

昭和村の概要

昭和村は、群馬県の北部地域の赤城山北西麓に位置し、標高は260mから1,461mまでと、緩やかな高原地帯を形成しています。

主な産業は農業で、主要な農産物は日本一の生産量を誇るこんにゃくいもや、県内でも有数のレタスや、ホウレン草など、高原野菜の産地です。村の面積64.17kmのうち、約40%が農地という農業産地で、赤城高原野菜の生産振興、農産物加工品の開発、野菜の情報発信を進め、



▶ 河岸段丘ハーフマラソン



「やさしい王国」としての村づくりと商業・工業とも連携しながら安心・安全な農畜産物の生産に努めています。平成10年には、関越自動車道昭和ICが開通し、首都圏と約80分で行なうことができたことから「首都圏の台所」と呼ばれているほか、その立地を生かし世界的な企業も昭和村に進出しています。

また、谷川岳や武尊山、三国山脈などの名山を一望できる、雄大なパノラマの農村風景等が評価され、平成21年には「日本で最も美しい村」連合に加盟し、農

▶ 松ノ木平地区開拓者のテント村



業を基盤とした観光、交流、さらに景観を意識した改革への取組を進めてきました。そして、近年では、河岸段丘ハーフマラソンや望郷ラインセンターユリライイド（ロードレース）、赤城山登山道の開通などスポーツ分野の充実も図られ、元氣なむらづくりに取り組んでいます。

繋ぐフロンティア精神

今でこそ広大な大地が広がり、一大産地となった昭和村ですが、終戦までは松

などが生い茂る未墾地でした。赤城高原の未墾の地にクワが入ったのは戦後の昭和21年のことです。

この地の自然条件は、標高400～800m、傾斜3～8度ほどの準高冷地帯で、晩霜、降雹、集中豪雨等の気象災害を受けやすく、その土壌も榛名系火山灰土壌で軽石が多く、入植後もしばしば干ばつ等の水害に見舞われました。

こうした劣悪な自然条件に加えて、この地に入植した者のおよそ半分が農業未経験者であり、また開墾の道具もクワとスコップ、主に手作業ということで、開拓の困難さはまさしく血と汗の連続でし



◀ 動力耕耘機で前進

▶ 松ノ木平 ジャガイモ植



た。昭和25年の群馬県開拓課の調査によると、昭和20年の入植以来、わずか5年後には県下の累積離農者戸数は1,002戸におよび、当時の入植者の約30%に達していました。この数字は開拓がいかに困難なものであったかを物語っています。この地も例外ではなかったのですが、県内の離農者の割合と比べるとかなり低く、先人達の強い開拓魂が感じられます。

またこの頃の農作物は、そばやじゃがいも、粟、きび、大豆、小豆、サツマイモ等の穀類で、その生産量は自給用ですら十分な量を確保できない状況だったと

いいいます。昭和20年代を開拓期とする
と、昭和30年代は商品生産期の前期、す
なわち、商品としての作物生産が徐々に
進展していった時期といえます。すでに
粟やひえ、キビなどは消え、大小麦や大
豆、小豆等の割合が高く、とうもろこし
やじゃがいも、こんにゃくなども、商
品生産期に中心となる作物のシェアが大
きくなり、野菜類も数、割合ともに少な
いながらも姿を見せ始めています。

昭和30年代から40年代にかけて、水利
施設がようやく完成し、昭和45年以降は
酪農家と野菜農家の分化が進み、野菜特
化期に繋がってきました。昭和50年代に
入る頃には野菜以外の作物はほとんど減
少し、特に穀類、いも類、豆類の減少は
著しかったといえます。

その後、消費者の需要に応え多様化し
た野菜作りに特化した取組は年毎に進
み、担い手不足が嘆かれる昨今でも本村
では、2代目、3代目と先代が築き上げ
た広大な大地と、新たな挑戦をし続ける
フロンティア精神が受け継がれています。

農村女性の活躍と伝統の味

昭和村では、野菜生産量の増加に反し
て穀類、大豆等の生産量減少が進む一方
で、古くから作られていた味噌や醤油な

どの伝統の味や技術は受け継がれてきま
した。そのような中、地域の婦人達は農
作業の合間をみて集まり、協同で材料を
集めて農産物の加工をしながらコミュニ
ケーションをとる、そんな活動が基にな
り、平成9年に『さくら工房』は設立さ
れました。

さくら工房は「みそ部」「農家レストラ
ン部」「ジャム部」「こんにゃく部」
「ジュース部」の5部門で構成されてお
り、農家女性ならではの「手作り・こだ
わり・思いやり」で、安心・信頼できる美
味しい加工品を目指しています。また、
地元農産物を利用した加工品ということ
で地産地消も推進しています。

先人が苦難を乗り越え荒野を開墾した



▲こんにゃくいも（三年生）

農地を受け継ぎ守っていくように、農村
の女性達も伝統の味や技術の伝承・普及
に努めています。

さくら工房の活動

平成9年に加工施設「飛躍」の完成に
併せて設立されたさくら工房ですが、こ
の施設で各部会それぞれが加工品等の製
造に取り組んでいます。

また、地域づくりの観点から、地元農
産物等の加工品の製造・販売はもちろん
のこと、村内のごみ拾いや村有林の下草
刈りなどの環境美化活動、毎年10月に開
催される、1年の実りに感謝して行う
「昭和の秋まつり」への参加など、村をは
じめ商工会、農業観光協会、JA等と連
携し、地域に密着した様々なPR活動に
も取り組んでいます。

友好都市でもある横浜市において毎年
開催されている横浜開港記念バザーに
は、会員が交代で参加し、新たな販路拡
大や昭和村のPRをするとともに、来場
者との交流を深めています。

こうした活動を始めた頃は、家族の理
解を得ることが難しかったと言います
が、活動後のコミュニケーションは息抜
きとなり、仕事とのメリハリができ、現
在の充実した活動を引き継がれています。



▲環境美化活動の取組

観光拠点と地域づくり

平成23年7月にオープンした、昭和村
の観光の拠点施設「道の駅あぐりーむ昭
和」は、関越自動車道昭和ICを降りてす
ぐという立地の良さもあり、年々業績を
伸ばしているところ です。

施設内にある農産物直売所「旬菜館」
では、地元産の新鮮野菜が所狭しと陳列
されています。さくら工房の加工品もこ
こで販売されており、各工房の製品が
入った「さくら工房セット」は贈答用にも
多く使われております。

また、飲食ブースではさくら工房とし
て農家レストランを運営する事になり、

◀地元産の新鮮な野菜が並ぶ「旬菜館」



日本一の生産量を誇るこんにやくいもを使った「こんにやくステーキ定食」や、地元ホウレン草のトッピングにキャベツの千切りが山盛りの「あぐりーむラーメン」など、地元野菜をふんだんに使ったメニューが楽しめます。その他にも野菜や果物で作ったジェラートがあり、中でも季節限定の生のいちご「やよいひめ」をその場でつぶしこんにやくで提供する「やよいひめジェラート」は子どもから大人まで人気の一品です。

県内外から訪れる多くのお客様と触れ合い、直接消費者から生の意見が聞けるこの取組によって、新たな発見や、改善点に気がつけるだけでなく、昭和村の顔

としての認識と責任も芽生えてきました。

課題と展望

こうした活動が認められて、平成26年には国土交通省及び全国各地域づくり推進協議会が主催する「地域づくり表彰」において、全国各地域づくり推進協議会会長賞を受賞しました。その他にも地産地消優良活動関東農政局長表彰など、女性ならではの視点で、食品の安全を第一に考え原材料や手作りにこだわり、納得したものだけを提供していくことを理念とした活動が着実に実を結んできていることを会員は実感し、自分達の地域と商品に



▶平成26年度 地域づくり表彰受賞

自信をもって元気に活動しています。しかしながら、消費者からはさらに安全で高品質、魅力ある商品の提供を求められているため、さくら工房はこうしたニーズに応えるべく、新商品の開発やさらなる安心・安全の提供、生産・製造・販売を一貫して行う6次産業化も視野に入れ、ブランド力の向上を目指しています。

近年では、さくら工房ブランドも定着しはじめ、ようやく軌道に乗ってきたところですが、後継者不足が今後の課題となっています。先人達から受け継がれてきた加工技術を絶やさないように、新規会員の募集や次世代への技術伝承にも力をいれていきます。



▶平成24年度 地産地消優良活動表彰受賞

先人が繋いでくれた大地とその恵みに感謝し、地域と共に活動を進めていきたいと考えています。

美しい村であり続けるために

平成26年に実施された住民アンケート調査で村への愛着度の結果をみると、愛着を感じているという人が8割、住み続けたいという人が9割と昭和村への愛着度は強く、評価の高い分野は「水道の整備状況」や「下水道の整備状況」であり、かつて水不足に苦労していた地域と思えないほど、今では充実しています。この愛着度の高さは単に水道整備状況が良いだけではなく、先人が苦難を乗り越え開墾し、それに感謝し受け継がれ、さらなる発展を目指してきた結果だと思えます。

子どもからお年寄りまで住みやすいむらづくりを目指すことはもちろん、美しい農村風景や自然環境も守っていくこと、住民と行政が一体となり、協働によるむらづくりを進めていくことがこれからも課題であり、すべての村民が「私のふるさと」として自信をもって誇れる村にしていきたいと思えます。

昭和村 産業課

(平成29年7月10日付第3006号)

農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進



三重県

御 浜 町

みはまちょう

新時代を迎える 「年中みかんのとれるまち」

御浜町の概要

御浜町は、三重県の南端にあり、北西は熊野市、南は紀宝町に隣接し、紀伊山地を背に雄大な太平洋を臨みます。また、熊野灘に面して、約20kmにわたって続く吉野熊野国立公園の景勝地で「日本の渚百選」にも



選ばれている「七里御浜」の中間に位置しています。その他、熊野古道横垣峠・風伝峠・浜街道は世界遺産にも登録され、美しく豊かな自然に恵まれた町です。

気候は典型的な海洋性気候で、年間平均気温は17・6℃、年間降水量は3、205mmの温暖多雨な地域で降雪はほとんどありません。この温暖な気候を活かし、一年中みかん（柑橘類）を栽培しています。その反面、台風の常襲地帯でもあり、短期間の強雨が多いことが特徴です。

「年中みかんのとれるまち」をキャッチフレーズとする御浜町は、「オール御浜」で町の活性化に取り組みとともに、子どもや若者から高齢者の方まで、豊かに、そして元気に暮らせる町を目指し、町民の皆さん

と手を携えながら「みんなが輝く希望と活力あるまちづくり」を進めています。

「年中みかんのとれるまち」の誕生

当地域における柑橘栽培の歴史は古く、文献によると240年余り前の宝暦6年（1756年）、紀州藩家老職であった新宮水野藩主がみかん



▶ マルチ（白いシート）栽培される「温州みかん」

の栽培を奨励したという記録があります。明治になり、みかん栽培が盛んになると、それまでの桑畑がみかん園に切り替えられ、なつみかん、戦後は早生温州みかんを主体とした産地として県内、中京圏を中心に出荷量を伸ばしていきました。また昭和40年代に当町で発見された極早生品種「崎久保早生」は高い評価を得て、早出しみかんの産地としての地位を確立しました。同時に地域内では柑橘の増産を望む気運が高まり、昭和50年度から平成3年度まで国営農地開発事業が実施され、約300ha、温州みかん以外の甘夏、伊予柑、セミノール等、中晩生柑橘を栽培することを目的とした農地を造成し、一年を通じて柑橘類を生産する産地として「年中みかんのとれるまち」の基盤ができてきました。

産地が直面する課題

しかしながら、オレンジの輸入自由化、食生活の多様化等により全国的に柑橘類の消費が低迷し、ピーク

時に全国で300万tあったみかんの生産量は80万tを切る状況になりました。その影響は御浜町にも暗い影を落とし、担い手の不足、耕作放棄地の増加等全国の柑橘産地と同様の課題を抱えることになってしまったのです。

昭和の終わりから平成のはじめにかけて約2万5千t、50億円あった御浜町の柑橘の生産量、生産額は、平成26年には約1万t、22億円とピーク時の約40%となり、産地の縮



▶ 都市部で開催される就農フェアでの就農相談

▶ 就農アドバイザーのもとでの農業研修



小を止められない状況になっています。生産者の高齢化や担い手の減少が大きな課題であり、将来の人口減少に対応するためにも柑橘産業の再興は御浜町の浮沈の鍵を握るテーマとなっています。

課題解決のためのアプローチ

産地の縮小は、これから人口減少社会を迎える地方にとっては避けられない現象です。一方で、産地として課題解決に向けた取り組みも数多

く提案、実施されています。柑橘産業と一言でいっても多角的なアプローチが可能です。生産、加工、販売、人づくり等様々な可能性を求めて主体的な取り組みが展開されており、御浜町ではそのような取り組みを通じて「低迷してはいるけれどもまだまだ可能性のある産業」として、柑橘産業を位置付けているのです。

三重県南部の柑橘産地は御浜町を中心に周辺の熊野市、紀宝町のエリアにあり、三重南紀農業協同組合が広域農協として、柑橘の生産、出荷、販売の核となっています。特にマルチ栽培された「温州みかん」や、ひとつひとつ袋かけ栽培により生産される「カラマンダリン」は三重ブランドに指定され、当地域のブランド力を裏付ける代表的な柑橘になっています。

近年は、御浜町内にある三重県農業研究所紀南果樹研究室が育成した新品種「みえ紀南1号」や「みえ紀南4号」が量産され、それぞれ「みえの一番星」「みえのスマイル」というブランド名で市場販売がスタートして

おり、新たな品種や先進的な栽培方法を積極的に取り入れながら、新時代の「年中みかんのとれるまち」として変化を続けています。

さらにJAでは平成27年度柑橘の選果プラントを更新し、これまでの光センサーによる高品質果実の選果、選別に加えて、果実の傷みを識別する腐敗果センサーなどの新しい技術を導入し、消費者からより信頼の得られる産地としての整備を実施しました。

また、JAを中心に県、市町による「三重南紀元気なみかんの里協議会」を組織し、担い手の確保活動に取り組んでいます。具体的には、就農フェアへの参加、農亲身体験、短期研修の受け入れ等、総合的な取り組みにより、新規就農者の確保に努めています。平成27年度には2名、28年度には1名の方が地域外から新規に就農し、Uターンによる就農者と併せて10名が、国の青年就農給付金の交付を受けながら地域の新しい担い手として農業経営に取り組みんでいます。

◀日本の渚百選「七里御浜」



交通アクセスの改善と交流人口の増加

平成26年紀勢自動車道、尾鷲熊野道路が隣接の熊野市まで開通し、これまで「陸の孤島」とまで言われた紀伊半島南部の地域も都市部との時間距離が劇的に改善しました。この影響は産業や流通、医療など多面的な効果を地域にもたらし、その効果



▲重点道の駅に選定された「パーク七里御浜」

は現在も継続しています。また、三重県では、熊野古道世界遺産登録10周年、伊勢神宮の式年遷宮、また今年5月に開催された伊勢志摩サミットなど、大きなイベントが重なり、全国的に地域の情報発信の機会に恵まれたこともあり、交流人口が継続的に増加しています。このような中、御浜町の道の駅「パーク七里御浜」は平成27年度国交省の定める重点道の駅に選定され、観光、集客交流、地域内の住民生活の拠点として期待さ

◀春と秋に開催される「みかん狩りツアー」



れています。パーク七里御浜では、地元産柑橘類の加工、販売等6次産業化を進めるための施設整備を実施し、平成29年度に見学スペースを設けたジューズ等の加工工場が道の駅内にオープンしました。

町としても、地域外の皆さんを対象とした「みかん狩りツアー」や、物

産販売をメインにしたイベント「みかん祭り」の開催といった地域間交流のアイテムとして柑橘を活用する取り組みも実施しており、将来的にはさらなる観光産業と柑橘の融合を期待しています。

TPP等市場のグローバル化への対応

J A三重南紀では、今後の柑橘の需要、市場のグローバル化に対応し、「温州みかん」「不知火」「せとか」に



▶タイ王国へのみかん輸出

ついて、タイ王国への輸出を全国の産地に先駆けて取り組んでいます。検疫等の手続きや輸送中の痛みの発生等の課題を克服しながら、輸出量の増加、他国への輸出等販路の拡大が期待されています。またJ A以外の事業者についても海外進出の取り組みが始まっており、今後の柑橘の販売を考える場合、海外の市場は重要なターゲットとして位置付けることが必要です。

また、企業とのコラボによる飲料や菓子パンの販売など、産地の知名度やイメージアップにつながる取り組みも広がりを見せていて、より消費者の皆さんに親しみを感じてもらえる産地を目指し、地域全体で取り組んでいます。



▶菓子パンメーカーとのコラボ商品

明日の「年中みかんのとれるまち」

柑橘産業は、まだまだ可能性のある産業です。しかしながら将来の人口減少、消費者の皆さんの生活の多様化など、産地にとっては厳しい状況が予想されることも事実です。御浜町ではこのような産地を取り巻く情勢と私たちの産地が持つポテンシャルを十分に理解する中で、産地が一体となって「年中みかんのとれるまち」づくりに取り組めるよう「御浜町かんきつ振興協議会」を組織し、生産者、販売事業者、J A、行政機関等が町の振興施策に関する意見を交換しています。今後さらに予想される高速道路網の延伸、TPP等による市場の開放など将来に向けた地域の変化を的確にとらえ、安全で高品質かつ消費者の皆さんに支持される産地として持続して行けるよう、新しい時代を見据えた農業振興を展開して行きたいと考えています。

御浜町 農林水産課

(平成28年9月19日付第2973号)

▼地域資源を使ったまちづくりが進んでいます

農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進

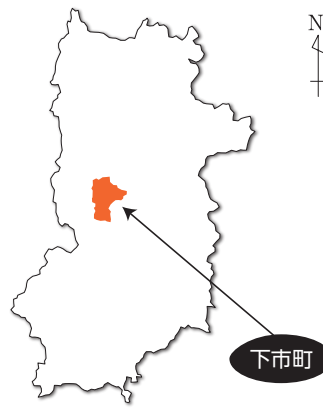


「らくらく」で、プラス10年イキイキ元氣 働く老若男女が笑顔で集う町

奈良県

下市町

しもいちちょう



下市町の概要

下市町は奈良県のほぼ中心に位置する、東西9km、南北11km、面積62・01km²を有する町です。割り箸発祥の地であり、また日本で最初の商業手形である「下市札」が発行されるなど、古くより吉野地方の主要商業地として発展してきました。町のおよそ8割が森林であり、全

取組の動機と経緯

これらに急峻な地形が多く柿を中心とする果樹農業と、森林資源を背景とする林業および割り箸や神具などの木工品製造が基幹産業ですが、両産業とも長期の価格低迷により苦戦を強いられています。
また、自然災害などの影響も相まって生産意欲の減退や、樹園地や森林の管理放棄や荒廃化が進んでいます。加えて、過疎化や高齢化も進行しており、これらの現状は町内山間地域のみならず、基幹集落においても深刻な問題となっています。

これらの課題に対し、真正面から向き合い、そして農山村を守り地域コミュニティの維持を目指す、それが「らくらくプロジェクト」の取組の始まりでした。
過疎化、高齢化に対する危機感や地域住民も強く感じており、中でも栃原地区は、問題意識の高い住民が多く、急激な高齢化と後継者難による地域社会の崩壊に対して強い危機感を募らせていました。

栃原地区は83戸の住民(当時)のうち、
 専業農家数が4割を占め、100haの
 柿畑を有する農山村地域です。地域内の
 柿畑は最大斜度20度を超える急斜面が8
 割で、農業経営の将来への不安は、地域
 住民の共通の課題でした。

そのような折、平成22年5月当時の栃
 原区長の元に奈良女子大学寺岡伸悟准教
 授(当時)、水垣源太郎准教授(当時)と、
 奈良県農業総合センター濱崎貞弘総括研
 究員(当時)が、共同研究事業計画の相
 談に訪れてきました。内容は、独立行政
 法人 科学技術振興機構社会技術研究開
 発センター(RISTEX)の「コミュニ
 ティで創る新しい高齢社会のデザイン」
 に応募してはどうかというものでした。
 栃原区長は本町にも相談し、町はプロ
 ジェクトへの協力を確認し、事業計画の
 策定等関係を深めていきました。さらに
 翌年には三晃精機株式会社の笹岡元信社
 長をメンバーに加え、1年をかけたさら
 に緻密な情報交換・協力体制を組み平成23
 年10月には、「高齢営農者を支える『らく
 らく農法』の開発」プロジェクト(らく
 らくプロジェクト)を立ち上げました。
 『らくらくプロジェクト』は、「農村地域の
 高齢者こそ我が国の地域対策の要である」
 との信念のもと、高齢で農業を諦めよう

としている営農者が、さらに10年延長し
 て、楽に楽しく、現役を続けられるよう
 にすることを目標として計画しました。

らくらくプロジェクトの 内容

らくらくプロジェクトは、大きく分け
 て4つの取組から成り立っており、それ
 ぞれの取組の連携や協力によりプロジェ
 クトを推し進めていきます。

1. 「集落点検」

集落点検によって、栃原地区の地勢や

高齢者の営農を支える「らくらく農法」の開発

奈良女子大学・奈良県農業総合センター・三晃精機株式会社・奈良高専



10年延長して農業を続けられるように
 畑仕事をユニバーサルデザイン化!



具体的な調査の内容として、営農の継
 続性についての調査では、農地毎の10年
 後の耕作予想をした農地マップを作成し
 た結果、約三分の一の畑が10年後に消滅
 するかもしれない事がわかりました。ま
 た、同時に行った他出者についての調査

土地利用状況、住民や栃原地区から他出
 した血縁者に関する情報などが収集・整
 理され、地区住民が地域の衰退防止・発
 展方策について議論する上での資料とし
 て提供されました。
 特に営農の継続性や地区外へ出て行っ
 た元住民の動向といったデータは町とし
 ても調査を行ったことがなく、今後の町
 政の進め方に大きく寄与する情報となり
 ました。

集落点検では



▲皆でワイワイ楽しみながら、
 白地図に畑や集落の情報を
 書き込みました。

では、その約97%が日帰りできる近隣に
 住んでいることがわかりました。

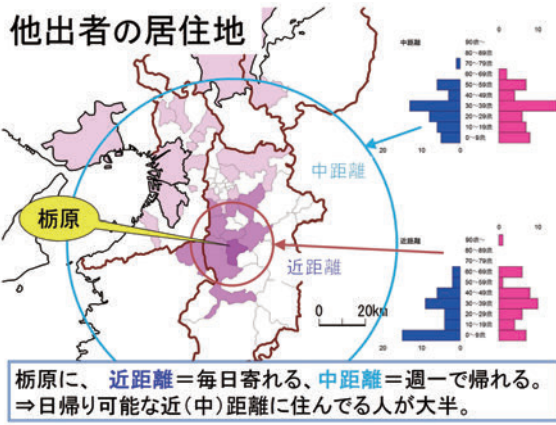
さらに町では同プロジェクトの取組に
 触発され、奈良女子大学の指導のもと谷
 地区と平原地区でも集落点検を実施しま
 した。地域の処方箋を作り町政に反映さ
 せる上で、大変貴重な調査方法を得たと
 考えています。

副産物として、寺岡准教授、水垣准教
 授らが引率する奈良女子大学の学生が、
 栃原地区を中心に町内の活動に参加・訪
 問することが、地域住民に大きな刺激を
 与え、その後の様々な取組への積極的な
 姿勢に繋がっていると云えます。

2. からだ点検とらくらく体操(PPK)

からだ点検によって、頑健で柔らかい身体を維持していると思われる高齢の農業従事者が、意外に体が硬く、力も一概には強いとは言えないことが明らかとなりました。このことは、営農を続けるために必要な条件を検討する上で貴重な資料となりました。

また、農作業で疲労が蓄積する箇所の特定と、その疲労を軽減・解消するため考案された「らくらく体操(PPK)」は、地域住民、特に女性の間で好評で、女性グループから体操を覚えて地域の高齢者等に普及していきたいという意欲を



喚起することに繋がっていきました。

3. 電動運搬車らくらく号

従来のエンジン式運搬車は操作が煩雑で、緊急停止などの安全対策も進んでおらず、現在でも高齢営農者が作業中に起こす事故原因のトップ3になっていきます。そこで三晃精機株式会社と国立奈良工業高等専門学校は、栃原のような急峻な地形でも、荷物を運んで確実に動作し、かつ高齢者でも簡単に操作が出来る危険時には難しい操作なしに確実に停止することが可能な新しい電動運搬車を試作しました。試作車は95歳の女性でも全く違和感を覚えず安全に操作することができ、栃原地区の柿生産者による試験運用でもその能力の高さが評価されました。

中でも、車輪の中にモーターを埋め込んだ「インホイールモーター」を用いた電動一輪車は生産者から高評価を得て、試験後もこのまま地元においてもらうよう強く求められました。そのため町としても電動一輪車の利用価値が高いと判断し、同機を購入し柿生産者に貸与することとしました。

4. 柿葉のらくらく栽培技術の普及と販売の確保

奈良県農業総合センターでは、「重く大変な果実生産から軽くて楽な柿葉生産へ」シフトすることを骨子とした、柿の「らくらく栽培」技術を開発しました。また、奈良県特産の柿の葉すしを生産販売する柿の葉すしメーカー社長を柿葉生産者に紹介し、販売ルートの確立と生産振興を推し進めました。さらには、技術の普及と柿葉生産を広げていくための栽培展示圃場を栃原区内の柿畑に設けました。

柿葉生産は年々拡大し、平成24年は16万枚、25年は24万枚、27年には50万枚を超え、当初4人からスタートした生産者も、27年には15名まで拡大しています。拡大した要因として、柿葉の生産販売組織「農事組合法人 旭ヶ丘生産販売協同組合」が設立されたことが挙げられます。

さらに濱崎総括研究員からは和菓子業者の紹介、菓草などの栽培指導など、組合の安定的な経営の確立に寄与する活動を得て、組合として積極的な営農活動が続けられています。町としても、この取組が日本の未来、農村を守ることに繋がっている思いから、「らくらく号」プロジェクトに本格的に参加し、地域との密接度の高い施策の実現に動き出しました。

* 現状と今後の課題 *

現在、栃原地区における柿葉農家数は13軒(平成27年8月現在)、柿葉出荷枚数は平成24年16万枚、25年24万枚、26年28万枚、27年50万枚と年々増加しています。

若年者には柿の実の栽培を行ってもらえない、年齢や地形等により柿の実の栽培ができなくなったときに柿葉づくりにシフトし、少しずつ柿葉生産者を増加させていくことにより、農村を守り、地域コミュニティを守ることに繋がっていききたい。そして、日帰りのできる近隣に他出している約97%の人が定年を迎えたとき、帰りたくなる元気な地域づくりをめざして頑張っていきたい

らくらく農法で生涯現役

江戸時代から栃原地域は柿の主産地として栄え「**柿の葉**」という品種があるくらいです。特に、私たちがその中でも柿の葉を中心に柿の葉寿司の原材料に使う柿の葉だけの生産をしており、栽培については**高品質栽培**を厳守し、4月に1回のみ散布に止める後散布は一切せず、色、つやを覚えて安心して**お寿司**に使用できる柿の葉の生産に努めております。

私達が丹精込めて生産しております。

組合長 清水 誠

○平原地区【詳細は「ハーブの里へいばら」で検索】

・平成27年8月住民が運営する
本格ピザハウスオープン



・住民みんなでつくった
ハーブティー販売中



ピザハウス「Erba(エルバ)」

- ・5月～10月の日曜日(11時～16時
売り切れ次第終了)に営業
- ・ベレット釜で焼き上げるピザ
でみみまで美味しく
- ・平原産 農産物を使用



レモングラス「ハーブティー」

- ・無農薬・有機栽培
- ・手作業で丁寧に加工
- ・色が良く自然が甘みがある

下市産の美味しいハーブティーができました！

レモングラス
Herb Tea

12g 450円 20g 380円

いと考えています。
地域を元気にする取組は他地域にも広
がりを見せています。この「うらぐらぐ
ロジエクト」をきっかけに、町内平原地
区や才谷地区において「下市町元気印集
落支援事業」の認定を受け、地域で話し
合いを行い事業展開に至っている例も出
てきています。
平原地区においては平原区むらづくり
委員会が主体となり、「みんなで取り組
む、薬草とハーブの里のピザハウス」事
業を展開。薬草とハーブを活用した地域

づくりを住民全員が参加できる体制で進
めることにより、多世代間でコミュニ
ティや生きがい生まれ、地域が誇る資
源を使うことによる頑張りさらなる地
域愛が生まれています。
他にも各家庭や地区の耕作放棄地を活
用したハーブ栽培、そのハーブを加工し
たハーブティーの販売、またハーブや地
元の農作物を活かしたピザハウスの整
備・運営など、これらを地域住民で行う
ことにより、地域コミュニティの維持や
地域の魅力発信にも繋がっています。

今後、事業を無理なく楽しく継続
していくためには、少しの儲けが重
要となり、ピザハウスへの来
訪者の増加、ハーブティーのさらなる
販路拡大などの課題に取り組みまう
としています。

また、才谷地区においては「集会所が
ゲストハウスに 自治会のおもてなし」と題した、自治会に
よるゲストハウスの運営が始まっ
ています。過疎化・高齢化により目的
地として来訪者がいない地域であっ
た才谷地域に、地域交流の推進によ
り人を呼び込み、その来訪者が魅力
を語り、そして住民もその魅力とそ
で暮らす価値に気づき、地域に「誇り」を
持つというサイクルを目指し展開し
ている事業です。

平成26年には、このような取組が評価
され、栄誉ある「プラチナシティ(※)」
に認定されたところです。また、この取
組は奈良女子大学のCOC+採択へとつ
なりました。今後、下市町や奈良県
みならず、日本全国における高齢化や
人口減少は顕著となり、営農放棄の拡大
や、地域コミュニティの低下や崩壊は喫
緊の問題であると考えます。下市町が取
り組んでいられるかわりのプロジェクトが、



町内にもさらに拡大し、日本全国で展開
されることを期待しています。

下市町 地域づくり推進課
(平成28年12月12日付第29083号)

※プラチナシティとは

アイディア溢れる方策などにより地域
の課題を解決し、プラチナ社会 実現に

向けた取組によ
りプラチナ大賞
運営委員会等か
ら各賞を受賞し
た自治体です。



(<http://www.platinum-network.jp>)

▼一面に広がる「南高梅」の梅林

和歌山県

みなべ町

みなべちょう

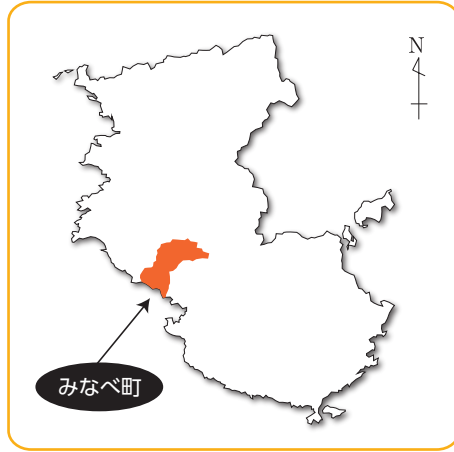
農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進



日本一の梅の里 紀州みなべの南高梅を世界へ

みなべ町の概要

平成16年10月1日、南部町と南部川村が合併して誕生した「みなべ町」は、和歌山県のほぼ中央に位置しています。総面積は和歌山県全体の約2.5%を占める120.28km²で、その約68%の81.91km²が林野面積です。また、農地の割合が比較的高く2割程度を占めています。東西に流れる南部川流域には丘陵地が広がっており、低地あり、山間地域あり



みなべ町の梅の歴史

平安時代の中期の文献にもすでに「梅干」という言葉が見られるように、梅の歴史は千有余年も前に遡ります。南部郷で梅栽培が盛んになったのは江戸時代初めからで、紀州田辺藩は自生梅しか育たないやせ地を免税地にして年貢

とバラエティに富んだ地勢です。丘陵地には日本一のブランドを誇る「南高梅」の梅林が広がり、山間部は森林、溪谷などの自然資源に恵まれています。また、炭の最高級品である「紀州備長炭」の生産も盛んで、備長炭の里としても有名です。南北には紀伊水道を臨む海岸線が伸びており、黒潮洗う海岸線は風光明媚な景観を誇っています。千里の浜は貴重な自然資源であるアカウミガメの産卵の地としても全国的に有名です。太平洋に面する海岸部、紀伊山脈に連なる山間部で構成された町内の交通網には、南北に走る国道42号、東西に走る国道424号、JR紀勢本線(岩代駅・南部駅)があり、高速道路・阪和自動車道のみなべにがあります。

▶千里の浜



を軽減することにより、農民を助け梅栽培を広げました。やがて梅干は江戸で人気が出るようになり、良品の梅を厳選した南部梅は「紀伊田辺産」の焼き印を押しつけた樽に詰められ、江戸で有名になりました。

明治時代には南部郷晩稻の中源蔵翁が郷内に加工場を建て、梅の生産から加工まで一貫した経営に取り組み商品化に成功。梅の里として発展する契機となりました。

大粒で肉厚、ジューシーな南高梅は、南部郷で長い年月の研究の末にたどりついた最高級品の漬け梅品種で、紀州みなべの梅干の原料となっています。

昭和25年、戦後の農業復興に際し、南部郷の梅の品種統一を図るため、郷内で

みなべ・田辺の梅システム

栽培されていた114種類の梅の中から、5年の歳月を費やして最優良品種の選抜を実施し、その結果、「高田梅」ほか6種が優良母樹に選定されました。中でも最も風土に適した最優良品種と評価された「高田梅」は、母樹選定調査研究に深くかかわった南部高等学校園芸科の努力に敬意を表し「南高梅」と命名されました。

現在、「南高梅」は、みなべ町で栽培される梅の8割を占め、梅のトップブランドとして日本国内はもとより、世界にもその名を馳せています。

「みなべ・田辺の梅システム」とは、養分に乏しく礫質で崩れやすい斜面を利用して薪炭林を残しつつ梅林を配置し、400年にわたり高品質な梅を持続的に生産してきた農業システムです。

人々は里山の斜面を利用し、その周辺に薪炭林を残すことで、水源涵養や崩落防止等の機能を持たせ、薪炭林に住むニホンミツバチを利用した梅の受粉、長い梅栽培の中で培われた遺伝子資源、薪炭林のウバメガシを活用した製炭など、地域の資源を有効に活用して、梅を中心とした農業を行い、生活を支えてきました。また、人々のそつした活動は、生物多様性、独特の景観、農文化を育んできました。

この梅システムは、この地域で暮らす農家たちが何代にもかけて、自然の中で学び代々受け継がれてきたものです。

世界農業遺産 認定までの道のり

みなべ町では、農家のほとんどが梅を栽培しており、梅の生産者や加工業者のほか、運送業や容器製造業などの関連業者を合わせると町の就業人口の約8割が梅と接点を持っています。

しかし、食文化の変化や慣習の変化による贈答品の減少、減塩ブームなどの影響で梅の消費量はピーク時の3割も減少しています。この打開策として「梅システム」の世界農業遺産の登録によって梅産業の活性化、梅の消費拡大に繋げようという動きが起きました。

平成26年5月、世界農業遺産認定を目標



▲世界農業遺産認定セレモニー



▲地域の方との農作業の様子

次世代につなぐ梅システム

指し、みなべ町、田辺市、和歌山県を中心に推進協議会が設立されました。その後、国際連合大学を始め多くの関係者の協力のもと現地調査を進める中で、みなべ・田辺地域の梅の農法には素晴らしい技術やノウハウがあることが分かってきました。同年10月には国内審査を通過し、そして、協議会設立から1年半後の平成27年12月にイタリア・ローマの国際連合食糧農業機関（FAO）本部で開催されたG-I-A-H-S（シアス）運営・科学合同委員会で「みなべ・田辺の梅システム」が世界農業遺産に認定されました。

この梅システムを後世へ受け継ぐためには、若い世代に梅に慣れ親しんでもらうことが必要です。そのため町内の小学校では、子どもたちに梅に関心を持つ

てもらえるような様々な取り組みがなされています。みなべ町立高城小学校では地域の方々の協力のもと、校内の梅畑で児童自ら梅の木の剪定や草むしり、梅の収穫などを行い、農作業を通じ、地域の人とのつながりを深め、地元地域の産業である梅栽培について実際に体験し学んでいます。

また、平成28年2月には梅料理コンテスト「UME-1グルメ甲子園」を開催し、近隣高校を始め各地の高校生がオリジナルの梅料理を考案し来場者に販売しました。「UME-1グルメ甲子園」は、高校生に商品開発・仕入・製造（調理）・販売のビジネスの流れを経験してもらう



▶ UME-1グルメ甲子園

◀ 高校生が考案したウメエス担丹麺



こと、みなべ町の様々な地域活性化の取り組みを見てもらい、一人一人が地域活性化の担い手であることを認識してもらうこと、また梅干という日本の伝統的食文化を再確認してもらうことを目的として開催しています。

みなべ町では、毎年6月6日を「梅の日」と定め、梅の恵みに感謝する日としています。また、平成26年10月には、「梅干しでおにぎり条例」が施行され、平成27年6月には「梅で健康のまち」を宣言しました。これを受けて、梅干しおにぎりを食べて健康に努めようと、6月6日の「梅の日」に各小中学校で給食に梅干しおにぎりを作って食べる取り組みも始めています。

みなべの梅を世界へ 梅で観光の町へ

梅産業の活性化・梅の消費拡大の一つとして「みなべ・田辺の梅システム」の世界農業遺産認定を契機に、海外市場への梅の販路拡大、海外からの観光客誘致に積極的に取り組み始めています。

販路拡大策としては、梅酒・梅シロップなど青梅の加工製品などは既に流通しているものもありますが、梅干においては、海外に梅干の食習慣がほぼなく、ほとんど流通していません。あってもお菓子（砂糖漬け）です。しかし、日本以上に海外では健康意識が強く、日本食や日本文化に興味を持っている人も多いため、「梅健康」「梅日本の食文化」をキー



▲ 梅干しおにぎりをほおぼる小学生

ワードにPRすれば、海外においても受け入れられる可能性があると考えています。そこでまず、梅文化を共有する中国や台湾市場に対して調査を進めています。観光客誘致に関しては、日本文化に興味を持ち熊野古道を訪れる方々が多い欧米諸国や、町内での宿泊が多い台湾、香港などを中心にPRしています。

またパンフレットや看板等の多言語化、Wi-Fi設備等の整備も進めています。この取り組みが、「日本一の梅の里みなべ町」を「世界一の梅(UME)のまちみなべ」へと変える道筋になればと考えています。

おわりに

この地域で昔から行われてきた農業が、すぐれたものであると世界的に認められ世界農業遺産に認定されたことは、みなべ町にとって財産であります。それと同時に、この「梅システム」をどのように後世に伝え守っていくか、また地域振興や梅の消費拡大につなげていくかが今後の課題です。

「行きたくなるみなべ町」「食べたくなる梅干し」を目標に、「みなべの梅(UME)」の魅力を国内外へ発信することはもちろん、地域住民にも改めて梅の魅力を再確認してもらい、ふるさとに誇りを持って、住民、地元企業、町が一丸となり梅を通じてみなべ町をさらに活気づけていきます。

みなべ町長 小谷 芳正

(平成28年12月19日付第2984号)

農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進

▼秋彩の金刀比羅宮裏参道



香川県

琴平町

ことひらちょう



琴平町の概況

琴平町はこんぴらさん(金刀比羅宮)の門前町として栄え、町内には歴史のある建築物が多く残っています。国指定重要文化財の旧金毘羅大芝居(金丸座)は、現存する最古の芝居小屋として今も活用されています。また、町北部は農業が盛んであり、特ににんにくは全国第2位の

産地である香川県でも最大の産地であり、にんにくを使った様々な取組により活性化を図っています。

○あらまし

琴平町の西端にある象頭山(しょうずたん)の中腹には海の守護神として信仰され、「こんぴらさん」と呼ばれて親しまれた金刀比羅宮が鎮座しています。特に江戸時代中期以降は庶民の間で金毘羅参りが盛んになり、全国から多くの参詣客を集めていました。参道には土産物屋などが並び、現在に至るまで四国有数の観光地として発展しています。

周辺町村と合併や編入を重ね、昭和33年に現在の町域となった本町ですが、平成の大合併時には単独での存続を選択しました。面積は約8.5km²で、香川県内の市町では2番目に小さい町です。

○地勢

琴平町は香川県の中央部からやや西よりに位置する内陸の町です。地形は南北

「住んでよし 訪れてよし」
未来の琴平の町を、もつと素敵に、楽しく、明るく、笑顔のあふれる町に

▶「さぬきこんぴらさん」で有名な
金刀比羅宮



くの旧街道が残っており、現在もそれが国道319号や377号、県道として町内を通っています。

○現況

町人口は平成27年の間に27.3% (3,446人) 減少しています。平成27年の年齢別人口割合をみると65歳以上の高齢者割合が38.79%と、全国(26.6%)や香川県(29.9%)と比べ高く、町内の3人に1人以上は高齢者となっています。

15歳以上人口の産業別就業者の割合は、1位が卸売・小売業、2位は製造業、3位は医療、福祉であり、香川県や全国と比べ製造業の割合が低く、宿泊業、飲食サービス業の割合が高くなっています。また、面積あたりの旅館・宿泊施設数は香川県内では本町が最多です。

以下、四国こんぴら歌舞伎大芝居とくにくを使った特産品事業、現在の取組について紹介します。

四国こんぴら歌舞伎大芝居

「四国こんぴら歌舞伎大芝居」の公演が行われる「旧金毘羅大芝居」(国指定重要文化財)は現存する日本最古の芝居小

▶現存する日本最古の芝居小屋「金丸座」



屋です。江戸時代は全国各地から金毘羅参りの参詣客が訪れたことから、天保6(1835)年に常設の芝居小屋が建設されました。「金丸座」の愛称で親しまれたこの芝居小屋は、昭和45年に江戸末期の劇場建築を考える上で重要な建築物として評価され、「旧金毘羅大芝居」として国の重要文化財に指定されました。また、昭和47年から4年をかけて、現在の金刀比羅宮の麓に移築復元されました。移築復元後、昭和59年にテレビの対談番組にて、出演者の歌舞伎俳優から、江戸時代の仕掛けや舞台を残す同芝居小屋で歌舞伎を公演したいとの希望がありま

した。

これを受けて、官民一体となって歌舞伎公演実現の動きが進み、昭和60年6月に「第1回四国こんぴら歌舞伎大芝居」が開催されました。この様子はテレビや新聞などを通じて全国に発信され、大きな反響を呼びました。その後、金丸座での歌舞伎公演は「四国こんぴら歌舞伎大芝居」の名で毎年春の風物詩として定着し、平成29年で第33回を数えます。

公演の前日には歌舞伎俳優を乗せた人力車が町を練り歩く「お練り」が行われ、大勢の見物客が集まります。金丸座の定



▶大勢の見物客が集まる「お練り」

に細長く、西に瀬戸内海国立公園、名勝天然記念物に指定されている象頭山があり、町のほぼ中央を二級河川の金倉川が南北に流れています。

○交通

鉄道はJR土讃線と、高松琴平電気鉄道琴平線の2路線が通っています。また、かつて金毘羅参りの参詣客が訪れたことから、高松街道や丸亀街道、多度津街道、阿波街道、伊予・土佐街道など多

▶ ボランティアによる「お茶子」



員は約720人で、毎回公演は、ほぼ満員となります。自然光のみで行われるため、夜の公演はなく、午前と午後に行われる公演をしています。第1回公演は、3日間で計5回でしたが、平成29年には16日間で計32回の公演となり、入場者は20,000人を超えました。

公演中は町職員だけでなく、ボランティアも活躍しています。舞台装置はすべて人力で動かすため、廻り舞台を動かしたり、セリを持ち上げたりなどの裏方作業は例年5〜10人の琴平町商工会の青年部が行っています。自然光を取り入れる窓の開閉もボランティアが行っています。

にんにくを使った特産品事業

入場者の案内やプログラムの販売は、「お茶子」と呼ばれるかすり姿の女性ボランティアが行っています。県外からの参加希望者も多い人気のボランティアで、日本全国から参加されています。

香川県は青森県に次ぐ全国2位のにんにくの産地であり、琴平町では昭和40年頃から盛んに栽培され、県内最大の産地となっています。この琴平町産にんにくを「こんぴらにんにく」として特産品化する動きが平成19年から始まり、香川県が主導するマッチング事業をきっかけとして、JAや町、町社会福祉協議会、加工業者などが協力し特産品化事業に取り組みました。

最初に商品化されたのは、琴平町産の規格外にんにくを活用し、にんにく成分をオリブオイルにしみ込ませた食用油です。商品化に際し、デザインやネーミングを隣の高校のデザイン科に依頼しました。農家がにんにく生産に手間をかけ大切にしていることから、商品名を大切に育てている「箱入り娘」をイメージして「ガリック娘」と名付けました。ポスターやキャラクターの「ガール」も

その後、考案されました。

農家からにんにくの提供を受け、「特定非営利活動法人ねむ工房」がにんにくのスライスなどの加工を行い、ガリックオイルとして商品化します。平成21年から社会福祉協議会が販売元となり、琴平町の観光協会が協力して食用油「ガリック娘」の販売を開始しました。当初の販売予想は年間2,000本でしたが、実際にはその5倍の約10,000本が売れ、その後も同量程度の売上げが続いています。

琴平産のにんにくは多くが都市部に出荷されるため、地元での知名度は低く、「ガリック娘」が販売されるまでは本

▶ こんぴらにんにく



▲ ガリック娘(左) とガリック侍

町が県内最大の産地であることを知らない町民が多かったのですが、認知度が高まるにつれて、生産農家の栽培意欲も向上してきました。また、町内の飲食店などでは、「こんぴらにんにく」を使った餃子や「ガリック娘」を使った骨付鳥やチーズケーキなど新たなメニューや商品が考案され、町を盛り上げています。

琴平町内の小・中学校では、平成21年度から地域を学習する教科として「まちづくり科」を新設し、このなかでにんにくを取り上げています。また食材として給食への導入も始まり、生徒の関心も高まっています。

町内の高校では、学生がにんにくを使ったレシピを考案しています。同校においては社会福祉協議会の主催で平成22年から「ガリック娘」を使った料理コンテストを一般の部、高校生の部として年1回開催しています。

「ガリック娘」の販売が好調なことから、琴平町商工会でも「こんぴらにんにく」を使った醤油、味噌、ふりかけを「ガリック侍」として商品化し、平成22年から販売を開始しました。その他、香川県内の食品製造業者も「こんぴらにんにく」を使用した餃子を製造販売しています。

「こんぴらこんにく」の商品化により、レシピ開発や料理コンテスト、小・中学校でのまちづくり学習など様々な取組へと広がっており、町民が地元を見直すきっかけにもなっています。



▶料理コンテストの様子

現在の取組

本町の人口は、昭和30年の15,046人をピークに減少し続けています。一方、老年人口(65歳以上)は増加傾向にあり、平成2年以降は年少人口(0〜14歳)を上回っています。

人口減少に伴い、地域における消費市場の規模が縮小し、人材不足、景気低迷を生み出すと共に、住民の経済力の低下をもたらし、高齢化の進展も相まって、地域社会の様々な基盤の維持が困難となりつつあります。

○地方創生

このため、本町の特徴を踏まえ、地域特性を活かした本町独自の施策を展開するべく「琴平町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を平成27年10月に策定しました。

策定以降、地方創生の交付金を活用し、交流人口の増加を図るため、観光基本計画の策定、インバウンド対策(外国語対応のPR動画、パンフレット、ホームページの作成)、景観計画の策定に取り組み、観光入込客数の増加を目指しています。

また、REASAS(地域経済分析システム)を活用し、「REASAS活用事例集」を内閣官房まち・ひと・しごと創生本部に提出し、その分析事例の一部が「REASASフォーラム2015」に紹介されました。

この分析は、本町が「讃岐のこんぴらさん」の愛称で知られる金刀比羅宮を中

心に発達した門前町であることから、同じ門前町として有名な三重県伊勢市(伊勢神宮)、島根県出雲市(出雲大社)との比較を行った点がポイントでした。その比較の中で、本町は「宿泊業、飲食サービス業」の労働生産性が伊勢市、出雲市に比べて高い水準でした。一方で、「食品製造業」は、伊勢市、出雲市に比べて低い水準でした。

○住民参加による自走型まちづくり団体



▶琴平コトコト会議

この分析から、特産品の販路開拓や新ブランドの開発を施策として戦略的に取り組むことが必要と考え、「特産品開発事業補助」を行い、商品開発に取り組みました。

また、新たな特産品の開発や、地域ブランドディング等といった観光業に対するテコ入れを検討している中、「観光関係者と住民とのつながりがありなかった」、「そもそも観光業のあり方に対する「考え方」や「想い」の意見交換やすりあわせが無かった」という実情を踏まえ、まずは琴平町民をはじめ地元に関わる関係者一同の意識改革を行うことに着手し、「チーム縁の下」(住民参加による自走型まちづくり団体)の設立を経て、琴平の未来を考える会議「琴平コトコト会議」を開催しました。「まちのみんなのやりたい事、やってみたい事がやりやすくなること」を目指して現在も活動を続けています。

本町は、住民や訪れた方皆さまに満足いただけるまちづくりを推進し、「住んでよし 訪れてよし」な町を目指します。歴史と文化のまち、琴平町へ是非お越しください。

琴平町長

(平成29年10月23日付第30018号)

農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進



柑橘産業の持続を目指す町

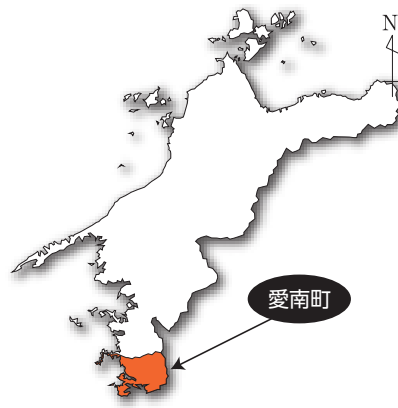
〜地域農政未来塾長

愛媛県愛南町を訪ねて
最優秀論文受賞者を訪問〜

愛媛県

愛南町

あいなちょう



生源寺塾長が愛媛県愛南町を訪問

両脇に柑橘畑の緑が茂る細い上り坂を抜けて町の高台に上ると、眼下には入り組んだリアスの海岸線が一望できる。海面には多くの養殖用いかだが規則正しく並び、海に迫る斜面には柑橘類の園地が広がる。この町の誇る産業が、よくわか

る風景だ。

平成29年10月、全国町村会が主催する地域農政未来塾の生源寺眞一塾長（東京大学名誉教授、福島大学教授）が愛媛県愛南町を訪問した。同塾の第1期生で、修了時の研究論文で最優秀賞を受賞した同町農林課職員の近平高^{たかよし}官^{たかよし}氏を訪ねるためである。

近平氏の論文テーマは、「柑橘産業の地域発展戦略〜愛南町の河内晩柑を考える〜」。同町の地域特性を活かした高品質の柑橘を取り上げ、データを基にした現状分析と課題を提示、現場を知る自治体職員ならではの強みを活かした積極的な提案は、高く評価された。

〜地域農政未来塾について〜
地域の課題に気づき、学び、提案し、実行できる町村職員の養成を目的に、平成28年度から始まった。農政や地域づくりに関わる町村職員20名を

対象に、毎年5月に開講、翌年1月まで計7回の講座を実施。各界を代表する講師を迎え、講義やゼミ、現地調査を実施。塾で学んだ成果の集大成として塾生は研究論文を作成する。

愛南町の柑橘生産の状況

四国の南西部に位置する愛南町の主産業は第一次産業である。特に水産業が盛んであるが、温暖な気候を利用した柑橘類の栽培も精力的に行われている。中でも愛南町で多く生産されているのが河内晩柑である。

河内晩柑は「苦みが少ない和製グレープフルーツ」の異名をとる柑橘。つややかな黄色の皮を剥くと、柑橘特有の清涼な香りが漂う。□に含むとほごよい酸味の果肉から豊富な果汁がパリッとはじけ



▶和製グレープフルーツ「河内晩柑」の樹木

◀清水町長（左）と生源寺塾長（右）



て舌を潤す。柑橘類が少ない夏にも出荷ができ、果皮に認知機能を維持・改善する効果が認められた（H29・9愛媛県知事発表）のが特徴である。愛南町は河内晩柑の生産量日本一を誇る産地である。

今回の訪問では、近平氏の論文を再考しながら、柑橘生産者や役場担当職員と意見交換を実施した。意見交換会には、清水雅文町長、岡田敏弘副町長など役場関係者の他、生産者3名（河野仁氏、酒井眞理子氏、原田達也氏）が参加した。意見交換では、生源寺塾長から、近平氏の論文を通じ、愛南町の現状と課題、柑橘産業の振興に向けたアイデアを把握

できたことが紹介され、最優秀に値する秀逸な内容であったと感想が述べられた。続いて挨拶に立った清水雅文町長からは、高速道路も鉄道もない町だが、国立公園に囲まれ日本で最初に海中公園に指定された、豊かな自然を抱く町の様子が紹介された。

意見交換の様子を近平氏の論文になぞらえて、「ひと：担い手の確保」、「もの：生産基盤の確立」、「こと：ブランド力の強化」の3点に分けて紹介してみたい。



▶熱心に耳を傾ける生産者の方々

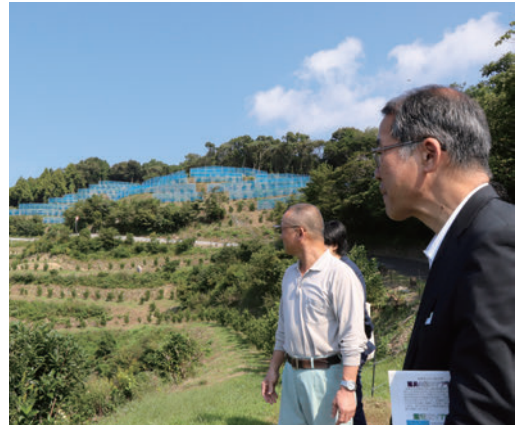
◀意見交換会の様子



「ひと：担い手の確保」にCSH

近平氏は自身の論文で、生産者における年代ごとの意識の差を指摘している。論文執筆時に河内晩柑生産者に対して行った今後の営農に関する意識調査では、高齢の経営体ほど縮小・リタイアの意向が強く、逆に若い年齢層になるほど規模拡大を望む傾向にあるという結果が得られている。

この点について意見交換に参加した生



盤の確立」にも関連してくる。近平氏は、論文の中で水田の耕作放棄地の増加傾向と、生産人口の減少予測から、平坦地にある水田の園地化を提唱している。平坦地など新規就農しやすい園地の不足は、後継者育成の観点からも課題として捉えており、水田の改良による園地の造成を構想している。

この水田の園地化については、町の「愛南柑橘農環境改革推進協議会」で検討しているとのことであった。

産者からは、「若者の中でも主体的に行動できる人と、攻め方がわからず受け身な人がいる」との指摘があった。前述の意識調査においても、現状維持を望む若手経営体は一定数存在した。そして現状に留まろうとする理由として、条件のよい園地が手に入らないことを挙げている。意見交換でも園地の話題が出た。斜度がきつく、作業に苦勞する段畑は若者も高齢者も敬遠しがちで、広い園地で機械化をしたいという若者が多いという。

「もの：生産基盤の確立」について

園地の問題については、「もの：生産基

「もの」に関して論文では加工場の整備を取り上げている。意見交換会に出席した生産者からは、「河内晩柑をジュースやゼリーに加工・販売しているが、町内に加工場がないため隣接の宇和島市にある加工場等で搾汁している」との発言があった。加工場の町内設置については近平氏の論文においても言及されており、これも水田の園地化とともに愛南柑橘産環境改革推進協議会で検討しているとのことであった。

果樹栽培は収穫時などに作業が集中するため、季節労働の色合いが強い。加工場の整備には、年間を通じた所得の確保と労働力の創出も期待される。

この点について生源寺塾長からは、「食品産業は大儲けできない。しかし、他

業種と比べても安定しているのが特徴。その点をとっても加工場の整備には意義がある」との意見が述べられた。近平氏は「町外で加工している人が多数いるという実感がある。今後は需要についての調査を行い、実現につなげていきたい。」と語った。

「こと：ブランド力の強化」について

3点目の「こと：ブランド力の強化」



▶生産者の河野氏（左）から説明を受ける生源寺塾長

に関連して、懇談会の中で大きな話題の一つとして挙げられたのが河内晩柑の名称統一についてであった。愛南町では河内晩柑について、「愛南ゴールド」の呼称による統一化を試みているが、商品名として「美生柑」や「御荘ゴールド」など複数の呼び名が混在している状況にある。統一化を行えば市場関係者への説明の際に混乱を避けられる等のメリットがある。しかしその一方で、すでに確立しているブランド名を手放すデメリットも存在するなど、意見の統一が難しい状況に



▶生源寺塾長と塾1期生の近平氏（左）

あるという。このため、町では「愛南町産」という点を押し出したPRを行う予定でいる。商品名は様々であるが、どれも美味しい愛南町産の河内晩柑であるという統一した方向性を打ち出し、外部へ訴えていくことを模索中だ。

生産者の酒井眞理子氏は、外部へのPRとして、ダイレクトメールによる販売を15年ほど前から行っている。

最初は1人だった顧客が、いまでは年間3、000人にまで広がっている。並行して実施しているネット販売よりも販売実績は高いとのことであった。スピード感や利便性においては、おそらくネット



▶町の高台より遠景をのぞむ

販売の方が優位にあるが、手書きの手紙を通じて伝わる作り手の想いやぬくもりが買う側の信頼感につながり、商品のファンを増やす結果となっているのだろう。

近平氏は論文の中で、塾の講義（6次産業化関係）で聴いた「モノを売る時代は終わった。モノに対する理念や思いが非常に大切」という講師のフレーズを引用している。酒井氏の取組はこのことを象徴する実例といえよう。

また、PRに関しては品評会にも話題が及んだ。品評会は生産者の意欲を喚起するとともに、消費者へ商品の価値を客観的に伝えることができる仕組みだ。愛南町でも品評会が行っているが、それは味よりも「見た目」のコンテストだという。その話の流れで出てきたのが、河内晩柑の風変わりな特徴である。河内晩柑は幼木の実の方が見た目はよいが、30〜40年経った老木に生る実の方が、外観は劣るが味は比較的良好とのことであった。河内晩柑を特徴付ける意外な側面は、有効なPR手法の開拓につながる思いがした。

この点、近平氏も論文の中で「アイデア一つで付加価値を向上させる仕掛けはいくらでもある」と述べている。

園地の整備や加工場の設置、知名度向上のための取組など、近平氏が論文で綴っていた課題の解決に向け、具体的に動き出そうとしている愛南町の様子を垣間見た。

また、普段から河内晩柑のかき氷用シロップを自宅で試作するなどしている近平氏は、訪問中の我々にも新作のPR動画についての所感を求めたり、河内晩柑のジューズをふるまい、その感想を聞き取ったり、情熱的で貪欲な姿勢を見せていた。種々の課題は山積し、悩みも尽きないにせよ、その先を見つめる創造的な仕事に意欲をもって取り組んでいるように見えた。

地域農政未来塾と町村職員

近平氏のように、町や村の未来を考え、必要な行動に移していく自治体の業務はとても創造的な仕事だ。それをこなすには地域の課題に気づくための知識や観察力、解決策を提案するための思考力、さらには周りを説得しつつ物事を進めていく実行力が必要となる。それらの力をもった職員の養成のために開講されているのが地域農政未来塾である。

未来塾を終えた後の心境を近平氏に尋

ねてみた。近平氏は、知見の習得もさることながら、何よりも同期の塾生との関係構築を挙げた。近平氏は修了後も河内晩柑についての追加調査を行っているが、そのモニター調査を同期の塾生にも協力してもらっているという。同じような悩みを抱え、多彩な地域から集う他の塾生とのつながりができることを未来塾の魅力として挙げる卒業生は多い。

近平氏は未来塾を受講して「仕事に対するスタンスが変わった」とも話している。「1、2ヶ月おきに東京へ出て講義を受け、最後に論文を書く。この卒業論文の作成が、町のことを深く考えるきっかけになった」という。地域への愛着はあっても、日々の業務に忙殺されがちな職員にとって、未来塾がいつもと違う環境で、地元のことをいつも以上に真剣に考える機会を提供する役割を果たしているのかもしれない。

未来塾は出会いの場だ。一流の講師陣から得られる新鮮な知識や有用な思考方法、そして苦楽をともにする同期の仲間。何に出会ったかは各々あるだろうが、その出会いは近平氏が語る、よい変化へとつながるものとなるだろう。

全国町村会経済農林部 高野実貴子

(平成30年1月15日付第3026号)

農林水産業振興、地域産業活性化、
企業連携・就業促進

▼長尾橋からの遠景

沖縄県

国頭村

くにがみそん



森の恵みを活かす新たな森林業・木育活動の推進 ～亜熱帯の森林資源活用による地域振興～

国頭村の概要

国頭村は、沖縄本島の最北端に位置し、県庁所在地の那覇市から車で2時間半ほどの距離にあります。村面積は19,482ha、沖縄県全体面積の約8.6%を占め、市町村合併が進んだ現在でも、県内市町村の中で5番目に大きい村です。

村の中央部には、沖縄本島最高峰の与那覇岳(503M)を含め島の背骨を形



森林業の取組

成する山々が連なり、それらを水源とする多くの河川は、水が清らかで豊富な水量を有しており、沖縄本島の重要な水源の役割を担っています。また、東は太平洋、西は東シナ海に面しており、海岸沿いのわずかな平地に20の集落が点在しています。

村士の84%を占める山林は、「やんばる(山原)」と呼ばれ、世界の中でもこの地域にしかない固有種のヤンバルクイナやノグチゲラ、ヤンバルテナガコガネなど貴重な国指定天然記念物が生息しています。生物多様性の豊かな森の多くは、平成28年9月15日に国内33か所目の「やんばる国立公園」に指定されています。さらに、この地域が「世界自然遺産」に登録されるよう、国、県と共に取組を進めています。

国頭村は、その豊かな森林資源を活かし、300年前の琉球王朝時代から首里城(那覇市：世界遺産)の建築材の供給や、当時、中国との交易で栄えていた重

要な交易船の材料の供給地として位置付けられていました。

その後、去った世界大戦で焼け野原となった沖縄本島中南部の戦後復興材をはじめ、家屋の建築材や燃料の薪炭材等の供給地として、村全体は栄えていました。

しかし、戦後のアメリカ統治の影響もあり、住宅様式は木造からコンクリートへ、人々の生活様式は新や炭等の燃料から石油やガスへと変化し、さらには県外産スギ材等の移入材の流入により、近年では、国頭村木材の需要は低下してきました。

そこで、木の持つ温もりや調湿効果などの効用を広く再認識してもらうとともに、森林の持つ多面的効用を最大限に活かす新たな森林施業「森林業」の創出を目指し、森の持つ癒し効果を活かした「森林セラピー」や森の動植物や人との繋がりを伝える「森林ツーリズム」、木炭やキノコ、木工製品等、森の恵みを活かした「特用林産物の生産」などの取組をはじめました。

そのような取組の1つとして、10年ほど前から、木材の需要を取り戻すことを目的として、村内の小学校全児童の机・イスを国頭産材に切り替えました。この机・イスは小学校の入学時に親子で組み立て、6年間持ち上がりで使用し、そして卒業時にその子ども達にプレゼントする取組が続いています。

さらに、国頭村森林組合では、製材から発生する端材を利用して、木目が日本



▲小学校入学時に親子で組み立てる机・イス

一鮮やかだと言われるリュウキユウ松の積木5,000ピースを制作し、県内の各種イベントに貸し出しする等国頭村産木材のPRに努めてきました。

「木育」との出会い

そんな中、平成24年2月に全国で国産木材利用の推進活動を展開している、東京おもちゃ美術館・多田館長と出会いました。そして、「木育（暮らしの中に木を取り戻す活動）」を知り、その伝達手段として「木製おもちゃ」が次のような点で適していると感じられました。

①「おもちゃ」は、主に幼児が手に取り遊ぶ道具だが、幼いころから「木製おも

ちゃ」に触れていれば、木の良さが肌にしみつく。その経験が小学生になった時には木製の勉強机をほしがり、大人になった時には木製家具を選び、木の住宅に住みたくなるなど、「木づかい」を好む可能性が高くなる。

② 幼児は興味の向くまま動き回るため、常に両親や祖父母は目が離せないが、「木製おもちゃ」に夢中になり一人遊びができる様子を見て、改めて木の良さに気付く大人も増えている。

③ 「木製おもちゃ」は、幼児が遊ぶ道具のため比較的小さな材料で制作可能で、製材の際に発生する端材など使い道の限られていた木材の利用にも適しており、無駄なく資源を利用できる、自然に優しく高付加価値な製品である。

そこで、「木製おもちゃ」を足掛かりに、国頭村の最大の地域資源である森林及びそこで育まれてきた木材を活用し、地域で行われている林業を発信する拠点施設を平成25年11月に国頭村森林公園内に整備しました。この施設は、企画・設計・監修に「東京おもちゃ美術館」のバックアップを受け、東京の施設の姉妹館「やんばる森のおもちゃ美術館」として誕生しました。

「やんばる森のおもちゃ美術館」の取組内容

「やんばる森のおもちゃ美術館」は、や

んばるの森の60%以上を占めると言われるスタジイを、室内入口のトンネルの壁材やフロアの床材に至るまで幅広く使用しています。壁の棚には約40種、120個余りの厳選された木製グッズが展示され、そのすべてを手にとって遊べるようになっていきます。

多田館長に「木目の美しさは日本一だ」と言わしめたリュウキユウ松を卵型に加工し、000個を敷き詰めた「ヤンバルクイナの卵プール」は、幼児が木の卵でいっぱいプールの中に潜るな



◀ヤンバルクイナの卵プール



▶やんばる森のおもちゃ美術館

▲美術館内



ど自由に遊べるため、美術館の一番人気のおもちゃです。

また、六角形をした6種類のやんばる産木材をマグネットで鉄製壁に貼り付

け、木材の素材の色を活かして思い思いのデザインを描き出す「壁画パネル」は、お客さんによって日々張り替えられるため、毎日見るのが楽しみです。

さらに、今から約300年前の琉球王朝の三司官で、山林の管理方法をまとめたことから「沖縄の林業の父」と呼ばれた「蔡温」の時代に植えたといわれるリュウキュウ松は、特別に「蔡温松」と呼ばれ大切に保護されていますが、不運にも台風で倒れた直径2m近くの「蔡温松」を利用し、室内の3か所にミニコメントとして配置して、森づくりの大切さを今の時代に伝えています。

このように美術館のおもちゃには、木の温もりや香り、色合い、手触り、音などを感じとれるよう随所に工夫を凝らしていますが、多様な感性を持つ子ども達

は、おもちゃ作家の意図を超えた遊びをしたり、違う種類のおもちゃを組み合わせて遊んだりと、見ていて飽きないし、その自由な発想には感心してしまいます。

また、児童の付き添いで来られる両親の多くは、一緒におもちゃで遊んだり、夢中で遊ぶお子さんの姿を微笑ましく眺めたりするなど、最近他の場所でもよく見かける、携帯電話を操作しながらお子さんと過ごす光景を見る機会も少ないような気がします。

美術館に来場するお客さんの中には、高齢者の団体もいます。その中には、おもちゃで夢中になって遊ぶ人や、木に触



▲移動おもちゃキャラバンセット

▲出張イベント



れながら子ども達の頃森の中で遊んだ話に花を咲かせるグループもあり、この施設の魅力と多様性を改めて感じていきます。

さらに美術館では、国頭村まで足を運ぶことが難しいお子さんのため、卵プール等のおもちゃセットを2メートルラックに積み込んで、持ち運び出来る「移動おもちゃキャラバンセット」を用意しており、年10回ほど県内の各種イベントや保育所・幼稚園などの幼児施設に出向き、国頭の森のPRや木育推進に努めています。特に、遠出の難しい、長期入院中の幼児や、養護施設の子ども達には非常に喜ばれています。

「おもちゃキャラバン」に参加した保護者からも「おもちゃ美術館があることは知っていたが、遠くへ行けなかった。この様な機会があつてうれしい」との声が多く聞かれ、活動の励みになっています。

森林業推進活動のこれから

おもちゃ美術館を整備し新たな木育活動を開始して約4年になるところですが、整備前と整備後の森林公園の有償来園者数を比較すると、整備後の来園者は、倍増の15,000人(平成27年度実績)にまで伸びており、公園施設の活用に大きく寄与しています。

おもちゃ美術館は、やんばる国頭村の森の豊かさや森と人との繋がり、木材の有用性を発信する拠点施設というだけでなく、村の観光施設の1つでもあり、自然フィールドを使つての体験が主要な本村の観光施設の中で、雨天時にも観光客の皆さまにご利用頂ける重要な場にもなっています。

しかし、おもちゃ美術館の名前は知っていても、国頭村へは遠くて足を運べない方々への動機づけや、実際に訪れたお客さまが持ち帰りたくなるお土産等の開発、一度来たお客さまをリピーターに繋げる「おもてなし」技術のスキルアップ、木育活動を担う人材の確保など、まだまだ課題は山積しています。

今後は、世界自然遺産への登録の聲が上がるやんばる国頭村の地域資源を保全しつつ最大限に活用し、「森林業」の創出を図りながら、その拠点施設の魅力向上に努めていきたいと思っています。

沖縄においでの際は、是非、国頭村までお越しください。村鳥のヤンバルクイナと共にお待ちしています。

国頭村長 宮城 久和
(平成29年1月16日付第29009号)